

# 清少納言と会話する男性貴族：女房と交友のある男性貴族の考察のために

著者名(日)	高橋 由記
雑誌名	大妻国文
巻	43
ページ	47-60
発行年	2012-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00001273/">http://id.nii.ac.jp/1114/00001273/</a>

## 清少納言と会話する男性貴族

——女房と交友のある男性貴族の考察のために——

高 橋 由 記

はじめに

『枕草子』に記される人物は多い。しかし、全ての人物が清少納言と交友があるわけではない。名のみ記される人物や、清少納言との交渉なく登場している人物もいる。たとえば三二段「小白河といふ所は」<sup>1)</sup>は、寛和二年（九八六）六月に藤原済時邸で行われた法華八講が舞台となっているが、藤原佐理（当時四十三歳）は「佐理の宰相なども皆若やぎだちて」（上52）と、若々しい服装で法華八講に出席していたことが記されるだけである。同様に、一三二段「五月ばかり、月もなう」では、「御前の竹を折りて、歌詠まむ」（下24）として、源頼定や六位蔵人が「同じくは職にまゐりて女房など呼び出できこえて」と思い、職の御曹司にやって来たというが、清少納言をはじめとする女房と頼定との直接的な交渉は何ら記されていない。登場すること・記されることにも意味はあるが、登場の「質」も重要であろう。清少納言と交友のある男性貴族を確認・考察することで、広く、後宮女房と交友のある男性貴族を考察する際の一助にしたいというのが、小論の目的である。

# 一 清少納言との会話が記される人たち

以前、『枕草子』に名に見える上達部について考察した際、①中関白家以外の上達部の登場した章段は、三三段（小白河といふ所は）・一〇〇段（淑景舎、春宮に）・一二五段（関白殿、黒戸より）・二六三段（関白殿、二月二十一日に）といった「晴」といふべき章段に集中していること、②描かれ方は名のみであることがほとんどで、上達部が個人的に定子後宮を訪れたことが記された章段は一つもないこと、③清少納言の出仕前から上達部であつた人物は、『枕草子』にほとんど見えないことを確認した。<sup>②</sup>『紫式部日記』には「そのほかの上達部、宮の御かたにまゐり馴れ、ものをも啓せさせたまふは」<sup>③</sup>（200頁）とあるから、中宮定子・中宮彰子の違いはあろうが、上達部も中宮の所に立ち寄ることはあつたのだろう。したがって、上達部との直接交渉が記されないのは、清少納言個人に関わる問題といえよう。清少納言との会話が記されている男性貴族が殿上人であることは前稿から想像されるが、殿上人といってもさまざまで、実際にどのような人たちなのか確認したい。

清少納言との会話のある男性貴族は次の通りである。章段内の官職表記は誤っていることもあるもの、おおよその階層をつかむため、そのまま記した。清少納言との会話を含む章段だけを集めたものであり、登場章段のすべてではない。登場順（章段順）に記し、便宜上、番号を振った。

- ①平生昌（大進／五段）
- ②源成信（権中將・大殿の新中將／九・二六〇段）
- ③藤原伊周（大納言殿・内的大臣殿／二〇・九五・一七九・二六三・二九七段）

- ④ 藤原行成（頭の弁／四六・一二八・一三一・一三二段）
- ⑤ 源宣方（中将／七八・一五六・一五七段）
- ⑥ 橘則光（修理の亮・左衛門の尉／七八・八〇段）
- ⑦ 藤原齊信（頭の中将・宰相の中将／七九・一三〇・一五六段）
- ⑧ 高階明順（明順の朝臣／九五段）
- ⑨ 藤原公信（侍從殿／九五段）
- ⑩ 藤原隆家（中納言／九八段）
- ⑪ 藤原信経（式部の丞／九九段）
- ⑫ 藤原実成（中将／一〇二段）
- ⑬ 源方弘（方弘／一〇四段）
- ⑭ 平惟仲（左大弁／一二八段）
- ⑮ 源経房（中将／一三一・一三八段）
- ⑯ 藤原道隆（関白殿／二六三段）

男性貴族に限ったため、人数はあまり多くない。また、一条天皇（七七・一五六段）は除いてある。

③内大臣・大納言と記される伊周、⑩中納言隆家、⑯関白道隆は上達部だが、中関白家の人物である。この三人以外でも、後に一条朝の「四納言」（『十訓抄』一）と称される④藤原行成や⑦藤原齊信といった貴顕も含まれるが、出自・年齢・身分はさまざまである。また、会話が事務的なものに過ぎない場合もあるため、ここに挙げた全員を清少納言と交友のあった人物とみることはできない。そこで次に、それぞれの人物の、章段における役割を確認したい。その際、定子のミウチ

である中関白家の三人（道隆・伊周・隆家）と、定子女房である清少納言とに会話があるのは当然といえようから、考察から外した。

## 二 会話の実体

以下、登場順に確認する。

①平生昌は、五段「大進生昌が家に」の主要人物である。定子に産所を提供した、いわば「家主」（上22）である生昌と、定子女房の清少納言との会話で、生昌と清少納言に個人的な交友があるわけではない。なお、「大進生昌」とあるが、章段の史実年時と思われる長保元年（九九九）八月は前大進である。

②源成信は、九段「今内裏の東をば」と二六〇段「大蔵卿ばかり」の二章段で清少納言との会話が認められ、他、会話は無いが、二五九・二七七段にも登場する。九段は、ならの巨木を「もとよりうち切りて、定澄僧都の枝扇にせばや」（上29）と成信が発言したのを覚えていた清少納言が、定澄が山階寺（興福寺）の別当になり（『御堂関白記』長保二年（一〇〇〇）三月十七日条）、そのお礼を述べに来た日に「など、その枝扇をば持たせたまはぬ」と成信に話しかけ、成信が「もの忘れせぬ」と笑ったという章段である。二六〇段「大蔵卿ばかり」では、「大殿の新中将、宿直にて、ものなど言ひしに」（下118）とあり、会話の内容は記されていないが、宿直をしている成信の話し相手を清少納言がしているのだから、清少納言との会話があったことは確かだろう。いずれも清少納言と個人的な交友があったとみてよいと思われる。成信は長保三年（一〇〇一）に右権中将の時に出家しており、九段の「権中将」、二六〇段の「大殿の新中将」は官職表記として正しいと思われる。清少納言と交友のある階層として、中将が挙げられることになる。

④藤原行成は、四六段「職の御曹司の西面」、一二八段「二月、官の司に」、一三二段「頭の弁の、職にまゐりたまひて」、

一三二段「五月ばかり、月もなう」の四章段に「頭の弁」として登場し、清少納言との会話が記される。

四六段「職の御曹司の西面」は数年の出来事がまとめられているが、清少納言が行成のことを定子にも褒め、また清少納言と行成が「遠江の浜柳（仲良くしよう、の意か）」（上71）と言い交わす仲であり、「下なるをも呼びのぼせ、常に来て言ひ、里なるは、文書きても、みづからもおはして（局にいるときは御前に参上させ、常にやってきてものを言い、里邸に下がっているときは、手紙を書き、また行成自身も来る）」（上72）という間柄だったことが語られる。後半では、行成が清少納言の顔を覗き見て以降は「局の簾うちかづき」（上74）と、簾をくぐることもあったというから、その親しさの程が知れよう。一二八段「二月、官の司に」は、行成が清少納言に「餅餠」を贈り、清少納言が「冷淡」と返した章段で、「みづから持てまうで来ぬしもべは、いと冷淡なりとなむ見ゆめる（自分で餅餠を持ってこない下僕は、とても冷淡とみえる）」（下18）という清少納言の返事に対し、行成は「しもべさぶらふ、しもべさぶらふ」と言いながらやって来た。二人の軽妙なやりとりは心地よいほどである。一三一段「頭の弁の、職にまゐりたまひて」は、『百人一首』にも入っている清少納言の代表歌「夜をこめて」が詠まれた経緯が語られる章段で、この歌も行成とのやりとりのなかで詠まれている。一三二段「五月ばかり、月もなう」は、呉竹を見て「この君」とすばやく答えた清少納言を称賛して内裏に引き返した殿上人たちと異なり、行成は職の御曹司に留まり清少納言と会話をしている。四章段ともに、行成が蔵人頭であったときの出来事で、職掌上、中宮女房の清少納言との会話もあったとは思われるが、行成は「ものなど啓せさせむとても、そのはじめ言ひそめてし人を尋ね」（四六段、上72）と、取り次ぎ女房として清少納言を指名していたとあり、また、清少納言の顔を見ていることや簾をくぐっていることから、職掌上のやりとり以上の親しさがみてとれる。

⑤源宣方は、七八段「頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて」、一五六段「故殿の御服のころ」、一五七段「弘徽殿とは」の三章段で清少納言との会話が記される。

七八段「頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて」は、頭中将藤原齐信が清少納言に関する事実無根の噂を信じて交友



を絶とうとしたという章段である。斉信の「問」に対する清少納言の「答」のすばらしさに感心した斉信が、清少納言に歩み寄る形で章段は終わるが、清少納言の知り得なかった殿上での出来事を、翌朝、いち早く伝えに来たのが宣方である。殿上では、人々は清少納言の元夫橘則光に「ただ、人に語れとて、聞かする」(上95)と話しており、つまりは、清少納言の手柄話を本人に伝える役目は則光のはずだった。それを、「つとめて、いとく局におり」(上93)た清少納言を待ち受けていた宣方が「いみじうかたはらいたきまで言ひ聞かせて」、「急ぎ立ち」去っていった。宣方が急いで立ち去ったのは、まもなく伝言役の則光がやってくることを知っていたからなのか、別の用事があったからなのかはわからないが、清少納言の喜びそうな話を、我先に清少納言に知らせる宣方に悪気はないであろう。一五六段「故殿の御服のころ」では、宣方は斉信の引き立て役のような役回りを担っている。清少納言と斉信が覚えていた三か月前の出来事を宣方がすっかり忘れていたことや、斉信に詩の誦し方を習い、「わざと習ひたまひけむがをかしければ」(下54)と、その効によって清少納言は「これだに誦ずれば、出でてものなど言ふ」という状態になったこと、さらにはあまりにも度が重なり、清少納言に呆れられたことが記される。清少納言にやり込められた話を一条天皇にも語った宣方を、清少納言は「もの狂ほしかりける君」(下55)と評しているが、これも、自分が道化役となるのを承知の上で一条天皇に清少納言の手柄話を伝えたとみれば、宣方の清少納言に対する親愛がみてとれる。清少納言の宣方に対する親しみはそれほど感じられないが、だからといって嫌悪しているわけでもないだろう。一五七段「弘徽殿とは」は、弘徽殿女御義子のところにいる左京と、宣方が昵懇になったという噂にまつわる話だが、噂の真偽はともかく、清少納言の辛辣な物言い、宣方は「いみじうまめだちて怨じたまふ」(下55)という。章段末の「その後は、絶えてやみたまひにけり」(下56)が、宣方と清少納言の交友なのか、宣方と左京の仲なのか、定説をみないが、一条天皇の女御義子は定子からみればライバルにあたる女性だから、清少納言にとって、義子や左京に良い感情があるはずもない。その左京との間柄が噂される宣方に対して、清少納言も複雑な思いがあったと思われる。清少納言の宣方への思いがどのようなものであったのかはわからないが、宣方と清少納言との会話は『枕草子』

に記されており、交友そのものは認めてよいだろう。なお、宣方は長徳四年（九九八）に中将を極官として没しているが、『枕草子』に記されたのも中将の頃である。

⑥橘則光は清少納言の元夫であり、七八段「頭の中將の、すずろなるそら言を聞きて」、八〇段「里にまかでたるに」に記される。清少納言と則光は、夫婦仲が絶えた後も友好的な関係を保っていたらしく、「いもうと、せうと、といふことは、上まで皆しろしめし、殿上にも、司の名をば言はで、せうととぞ付けられたる」（七八段、上95）とあるように、清少納言が「妹」、則光が「兄」とあだ名を付けられ、一条天皇までが知っていたという。とはいえ、六位蔵人の則光の、殿上における役割は決して高いものではなく、七八段では清少納言の手柄話を本人に伝える役割を与えられていた。先に述べたように、この手柄話は、翌朝清少納言を待ち構えていた源宣方によっていち早く伝えられていたため、則光の話は「はじめありけることども、中將の語りたまひつる同じこと言ひ」（上94）と、二番煎じになってしまったが、則光にしてみれば、宣方がすでに伝えていることなど知るよしもない。「言加へよ、聞き知れ、とにはあらず。ただ、人に語れとて、聞かするぞ」と、のたまひしになむ、すこしくちをしきせうとのおぼえ（『意見を述べろ、理解しろ、というのではない。ただ、清少納言に伝えてやれ、ということ、聞かせるのだ』と言われてしまったのは、ちよつと残念な兄としての評判だった）と、自分の不名誉なことまで逐一語り聞かせる則光の人の良さがにじみ出ている。八〇段「里にまかでたるに」は、「このたび出でたる所をば、いづくとなべてには知らせず」（上100）と、清少納言が里居所を一般に知らせなかったときの章段だが、源経房、源濟政とともに、里居所を知らされていたのが則光である。則光は斉信に「いもうとのあり所申せ」（上101）と責められており、七八段（長徳元年（九九五）頃）から数年を経ていると思われる八〇段（長徳三年（九九七）頃）においても、「いもうと」「せうと」のあだ名は健在だったということだろう。当該章段では、結局、「さて、かうぶり得て、遠江の介といひしかば、にくくてこそやみにしか」（上103）と、叙爵し殿上を下りて受領となった則光との仲が絶えたことを語るが、『枕草子』において、則光と清少納言は六位蔵人と中宮女房という職掌柄に加え、元夫婦という関係もある。



り、会話を交わしている。

⑦藤原齐信は、七九段「返る年の二月廿よ日」、一三〇段「故殿の御ために」、一五六段「故殿の御服のころ」の三章段で清少納言との会話が記される。齐信はこの他にも、七八段「頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて」、八〇段「里にまかでたるに」、八九段「無名といふ琵琶の」、一二四段「八幡の行幸の」、一九二段「心にくきもの（五月の長雨のころ）」の五章段に登場あるいは名が見えるから、記された回数之多さに比べ、清少納言との直接的な交渉の少なさが目立つ人物といえる。たとえば、七八段は齐信との関係の一方的な悪化とその改善ということが書かれながらも、実は清少納言と齐信の直接的な交渉はない。その七八段の翌年二月の章段が、七九段「返る年の二月廿よ日」で、職の御曹司への定子の遷御の供をせず梅壺に残った清少納言と齐信との交渉が記される。齐信から「かならず言ふべきことあり。いたう叩かせて待て」（上96）と言われていたが、御匣殿の召しに従った清少納言は局を空け、齐信は虚しく引き上げる。翌朝、梅壺の東面の半部を上げて齐信と対面した清少納言は、日が暮れて後に職の御曹司に参じ、齐信の衣装の「縫ひたる糸、針目」（上99）まで見ていたようだと言われている。一三〇段「故殿の御ために」では、故道隆の祥月命日の供養の際に齐信が場に応じた詩を誦したことを称賛し、一方、齐信から「などか、まろを、まことに近くかたらひたまはぬ」（下21）と、より深い間柄になることを求められながらも頑なに拒む清少納言の姿が記される。齐信は「さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたる」と語っているから、清少納言の自分への好意に自信を持っているらしいが、それが形になることはなかった。一五六段「故殿の御服のころ」はいくつかの話がつなぎ合わされている。宣方のところでも述べたが、三か月前の出来事を忘れなかった清少納言と齐信、それに対してすっかり忘れてしまっていた宣方という構図がまず描かれ、「女などこそ、さやうの物忘れはせね、男はさしもあらず、詠みたる歌などをだに、なまおぼえなるものを、まことにをかし（女だったら、そんな物忘れはしないけれど、男はそうではない。詠んだ歌だって、うろおぼえなのを、本当に〈物忘れしない齐信様は〉すばらしい）」（下51）と、物忘れしない齐信を高く評価している。続いて、囲碁の用語を使った齐信との会話や、

齊信の朗詠のすばらしさが道化役ともいえる宣方と比して語られる。清少納言の齊信描写は単に讃美とは言えないが、清少納言と会話していた（交友がある）ことは確かである。

⑧高階明順は中宮定子の母高階貴子の兄弟、つまり定子のおじだから、中関白家のミウチである。九五段「五月の御精進のほど」は、「郭公の声、尋ねに行かばや」（上128）と、ホトトギスの鳴き声を聞くために、賀茂の奥にある明順の別邸を訪ねた章段である。明順は清少納言たちを歓待し、「手づから摘みつる」（上130）下蕨をふるまった。明順は「家のあるじ」であり、そこを訪ねた清少納言たちと会話があるのも当然である。

⑨藤原公信は、明順と同じく九五段「五月の御精進のほど」に登場する。雨が降ってきたために明順宅を辞した清少納言たちは、帰途、「ただ卯の花の垣根を牛にかけたとぞ見ゆる」（上130）ように牛車を卯の花で飾った。「この車の有様を人に語らせてこそやまめ」（上131）と車の様子を誰かに見せたいと思いつつ「あやしき法師、下衆の言ふかひなき」では物足りないと思った清少納言は、一条殿のほどに車を止めて、「侍従殿やおはします」と公信を呼び出した。呼び出された公信は清少納言たちの牛車を追いかけて、清少納言たちと会話している。自邸でくつろぐ公信を呼び出したのだから、清少納言たちと公信は以前からそれなりに親しかったのだろう。章段の史実年時と思われる長徳四年（九九八）には公信は従五位下侍従（二十二歳）であり、つまりは清少納言たちにとって気軽に呼び出すことの出来る男性貴族がこのくらいの官位・年齢だったといえる。

⑩藤原信経は九九段「雨のうちはへ降るころ」に登場する。「式部の丞」（上138）と記される信経は、一条天皇の「御使」で定子の在所を訪ねている。信経が六位蔵人だった頃のことであろう。「例のごと、茵さし出でたるを、常よりも遠くおしやりて」とあるので、信経が御使として訪れるのは常のことであり、中宮女房である清少納言とも知り合いであった。とはいえ、清少納言にやり込められて「あな恐し。まかり逃ぐ」（上139）と信経は退出しており、章段に記される会話からは、清少納言の信経への好意・親近感のようなものはうかがえない。信経は御使として定子の在所を訪れ、定子の「御返り」

が書き上がるまでの間、清少納言たちと会話しているのだから、いわば職掌上あるいはその延長上の付き合いであり、清少納言と個人的に交友があったとまではいえない。

⑫藤原実成は一〇二段「二月つごもりに」に登場する。一〇二段は、公任から贈られた「すこし春あるここちこそすれ」(上147)に、清少納言が「空寒み花にまがへて散る雪に」(上148)と付けた章段である。清少納言の答えに対して、源俊賢は「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなさむ』となむ定めたまひし」と称賛したらしいが、俊賢のことばを清少納言に伝えたのが「左兵衛の督の、中将にておはせし(今は左兵衛督で、当時は中将だった)」(上148)人物であった。(当時)中将であることは章段の史実年時と、〈現在〉左兵衛督であることは『枕草子』の執筆年時と関わるので、誰が相応しいのか、従来問題になっている。三巻本勘物にあるように、実成が相応しいと考えるが、当時、宰相(参議)であったという公任や、同じく宰相と記される源俊賢は、清少納言と会話していない<sup>(5)</sup>。公任は主殿司を使者にしており、俊賢のことばを伝えたのは中将だった。中宮女房を気軽に訪ね、ことばを交わすのは、源成信・源宣方がそうであったように、中将のような階層なのであろう。

⑬源方弘は一〇四段「方弘は、いみじう人に笑はるる者かな」に記される。清少納言との会話は、方弘が「わが君こそ、もの聞えむ。『まづ』と人のたまひつることぞ」(上149)とわざわざ呼び出したので、清少納言が「なにごとぞ」と答えて「几帳のもとにさし寄」った折のことで、そのときの会話そのものは記されていない。「方弘は、いみじう人に笑はるる者かな」(上148)と、方弘は人々から笑われていたわけだが、清少納言たち女房にとっても、方弘はよく知った人物だったということだろう。方弘は六位蔵人であり、職掌上も女房たちと知り合いであった。六位蔵人である方弘は、清少納言と会話する人物のひとりである。

⑭平惟仲は、五段「大進生昌」に登場する平生昌の兄である。五段でも、生昌の語りの中で「中納言」(上24)として記されるが、そのときは清少納言との直接的な交渉はない。一二八段「二月、官の司に」は行成が清少納言に餅餠を贈り、

清少納言が冷淡と返した章段だが、そこに惟仲が記される。餅餠を贈られた清少納言が返事の仕方に困り、「返事、いかがすべからむ。この餅餠持て来るには、物などや取らすらむ。知りたらむ人もがな」(下18)と呟いたのを定子が聞き留め、「惟仲が声のしつるを。呼びて問へ」と助言し、清少納言は「左大弁に、もの聞えむ」と「侍して呼」び寄せた。呼び寄せられた惟仲は、定子の呼び出しと思い「うるはしくして」来たという。定子の助言があつて初めて呼び出したのであり、会話は事務的で両者の親しさは感じられない。章段内に記される行成の官職(頭の弁)と惟仲の官職(左大弁)に重なる時期がなく、どちらかの官職表記に誤りがあつたとして、当該章段の史実年時は長保元年(九九九)二月か長徳二年(九九六)二月が想定されているが、いずれにしろ、惟仲は上達部であつた(長保元年ならば中宮大夫兼中納言。長徳元年ならば左大弁兼参議)。上達部である惟仲と、清少納言とには、個人的な交友はなかつたと思われる。

最後が⑮源経房である。経房と清少納言は、一三一段「頭の弁の、職にまゐりたまひて」、一三八段「殿などのおはしまさで後」の二章段で会話が記される。経房は、清少納言が「なべて」には知らせなかつた里居所を知る一人であり(八〇段)、『枕草子』の流布に関与したともされてお(跋文)、清少納言との個人的な交友が認められる人物である。一三一段「頭の弁の、職にまゐりたまひて」は、清少納言が『百人一首』にも入っている代表歌「夜をこめて」を詠む章段である。章段末部に「後に、経房の中将おはして」と、経房は清少納言のもとを訪れ、行成が清少納言を褒めていたことを伝え、次いで「思ふ人の、人にほめらるるは、いみじううれしき(自分が大切に思っている人へ」清少納言」が、別の人へ「行成」に褒められるのは、とても嬉しい」(下23)と語つた。清少納言は「うれしきこと二つにて。かのほめたまふなるに、また、思ふ人のうちにはべりけるをなむ(嬉しいことが二つです。あの方へ」行成」が褒めてくださつたということに、また、貴方へ」経房」の大切な人のうちに私が入っているなんて)」と答えた。両者の親しさが知れよう。一三八段「殿などのおはしまさで後」では、長らく里に下がっていた清少納言のもとに、「右中将おはして、物語したまふ」(下33)と経房が訪ねたことが記される。経房は先に述べたように、八〇段でも清少納言の里居所を知る数少ない人物で、清少納言と



真に親しかった一人である。

### 三 会話のある人物の分類

以上の確認・考察を踏まえて清少納言と会話のある人物を分類すると、次のようになる（章段順）。

#### I 中関白家／その姻戚

③ 藤原伊周・⑩ 藤原隆家・⑯ 藤原道隆／⑧ 高階明順

#### II (権) 中将

② 源成信・⑤ 源宣方・⑦ 藤原齊信・⑫ 藤原実成・⑮ 源経房

#### III その他の殿上人（除 六位蔵人）／上達部

④ 藤原行成・⑨ 藤原公信／⑭ 平惟仲

#### IV 六位蔵人／その他

⑥ 橘則光・⑪ 藤原信経・⑬ 源方弘／① 平生昌

Iに入れた明順は、清少納言たちの目当ての場所の「家あるじ」であり、家主と中宮女房の会話である点はIVに入れた平生昌と同じである。ただ、明順は定子の外戚であり、また他の章段（二六三段）にも記されていることから、清少納言たちと以前からの知り合いであったことは平生昌と異なる。そこで、さらに清少納言と個人的な交友があったと認められるのか、単なる職掌上の会話・交友なのかで区別すると、次のようになる（中関白家の人物を除く）。

A 清少納言と個人的な会話・交友があったと想定される人物

②源成信（中将）・④藤原行成（頭の弁）・⑤源宣方（中将）・⑥橘則光（六位蔵人）・⑦藤原齊信（頭中将）・⑨藤原公信（侍従）・⑫藤原実成（中将）・⑮源経房（中将）

B 職掌上の交友が主であったと想定される人物

①平生昌（前中宮大進）・⑪藤原信経（六位蔵人）・⑬源方弘（六位蔵人）・⑭平惟仲（左大弁か中宮大夫）

Aに分類した人物も、⑥元夫則光を除いて、もともとは職掌上の会話から交友が始まったのであろうし、Bに分類した人物でも、職掌上の会話から個人的な交友になることもあったかもしれない。しかし、則光を除けば、六位蔵人との親しい交友は『枕草子』には記されていない。清少納言は『枕草子』に残すに相応しい人物・出来事を選んでいると思われ、<sup>⑥</sup>仮に、六位蔵人との個人的な交友があっても、それを『枕草子』に残すことはしなかったと思われる。

## おわりに

華やかな印象を受ける清少納言の交友関係であるが、『枕草子』において直接会話が記される男性貴族は多くはない。中関白家の人物（道隆・伊周・隆家）を除けば、ほぼ殿上人で、多くが中将であり、その他、職掌上、六位蔵人との会話も記される。記されなかったからといって、それ以外の男性貴族との交友がなかったわけではなからうし、<sup>⑦</sup>また行成や経房あるいは公信など、『枕草子』登場時には殿上人であっても、その後、上達部になった人物もいる。後に上達部になった人物との交友がいつまで続いたのかはわからないが、『枕草子』に記された限りにおいては、主家の人々を除けば、おそらくは中将が、清少納言が個人的な交友を持ち得る最高階層だったと考える。それゆえ、『枕草子』には中将との交友が殊更多



く記されたのではなからうか。『紫式部日記』は、上達部は「ものをも啓せさせたまふは、おのおの、心よせの人、おのづからとりどりにほの知りつつ、その人ないをりは、すさまじげに思ひて、たち出づる」(200頁)、『更級日記』には「上達部、殿上人などに対面する人は、定まりたるやうなれば」(333頁)<sup>(8)</sup>とあり、上達部や殿上人にはそれぞれに決まった取り次ぎ女房がいた。清少納言が定子のもとに出仕した時(正暦四年(九九三)冬か)、上達部であった人物にはすでにそれぞれ取り次ぎの定子女房がいたであろう。とすれば清少納言を心寄せにしてくれる上達部はいなかったのかもしれない。清少納言のような女房は、主家の人物を除けば、通常は、中将を最上とする殿上人と交友を持っていたことが『枕草子』の記述からみえるのではなからうか。

## 注

- (1) 『枕草子』の章段数・本文は、石田穰二氏訳注 角川ソフィア文庫『枕草子』上下(一九七九・八、一九八〇・四)による。(内は、上は上巻、下は下巻、数字はページ数は表す。
- (2) 拙稿『『枕草子』の上達部』(『枕草子の新研究 作品の世界を考える』新典社 二〇〇六・五 所収)
- (3) 『紫式部日記』の本文は、中野幸一氏校注・訳(新編日本古典文学全集『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』小学館 一九九四・九 所収)による。
- (4) 注(2)と同じ。
- (5) 『枕草子』には公任と清少納言との直接交渉は記されないが、公任は清少納言に贈歌しており、公任が清少納言を知っていたことは確かである。また、『公任集』には、公任とおそらくは宮仕えを退いた後の清少納言との贈答歌が残っている。
- (6) 拙稿『『枕草子』八〇段に関する疑問』(『大妻国文』四〇 二〇〇九・三)
- (7) 定子のもとに出仕する以前の清少納言が、貴族社会においてそれなりに知られた人物であったと思われる記述は『枕草子』にもある。増田繁夫氏は、三二段「小白河といふ所は」で、退出する車に声をかけたのは、義懐が「車の主を清少納言と知っていたからこそ」だとする(増田繁夫氏「中関白家と清少納言の宮仕え」、『国文学』学燈社 一九八八・四)。
- (8) 『更級日記』の本文は、犬養廉氏校注・訳(新編日本古典文学全集『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』小学館 一九九四・九 所収)による。